発音記号教材のオンライン授業における効果 一大学生の反応分析—

山本玲子*

*京都外国語大学 re yamam@kufs.ac.jp

要旨

本研究は、発表者を含む研究チームが開発した発音記号教材の効果検証の最終段階となる実践を報告するものである。小中英語教員や大学生を対象とした検証授業を経て改良を加えた本教材は、本実践授業の直前に完成に至った。音声学の履修経験のない大学生を対象に予定していた実践授業は、コロナ禍のおり完全オンライン授業となったため、その効果をも検証することとなった。半期を通し 10 分程度のモジュールで毎時間繰り返し指導を行った。学生のコメントを全 14 回の授業のうち初期・中盤・終盤・最終日に分け、記述をコーディング分析した結果、発音の向上や知識習得だけでなく、情意面・学びに向かう力・思考判断における向上が認められた。加えて今後の学び方への意識改革への言及もあったことから、発音記号は学生が自律学習者となるために有効であるとの結論が得られた。

キーワード:発音記号、自律学習者、教材開発

1. はじめに

日本の英語学習者が抱える課題は、英語特有の発音の習得(発音における Intelligibility の欠如)にあるとの考察に立ち、効果的な発音指導のための研究チームを立ち上げた。先行研究では、中高英語授業におけるカタカナ使用、英語教員自身の不正確な発音、教員養成課程で音声学が必修ではないという課題が要因として報告されている。これらの課題を解決し学習者、教員双方の発音を向上させるためには、カタカナに代わるものとして発音記号を使用すべきであると考察した。

中学校教員を対象とした調査では「発音記号の難易度を考えるとカタカナ使用が妥当である」と考える教員が相当数確認された。しかし小学校英語でアルファベット 26 文字に限定したフォニックス指導が開始したことで、事態は変わりつつある。/b/、/k/などアルファベットと文字・音が同一の発音記号が多数存在する。あらゆる年齢層の学習者を対象に、「アルファベットの文字と異なる記号」「フォニックスと発音が異なる記号」のみに焦点化し、検定教科書で採用されている簡易な発音記号を指導するための教材を、Microsoft PowerPointソフトウエアを使用し試作版として作成した。

2. 研究の経緯

2.1 大学生を対象としたパイロットスタディ

大阪の私立大学において、英語自由選択科目を履修した 18名(2回生 7名、3回生 11名)を対象に、半期毎時間 10分程度のモジュールで試作版を使用した発音記号指導を行った。TOEIC は最高得点の学生でも 400点前後と英語が苦手な学生が多く,発音記号の学習経験は皆無であった。絵と発音記号が記載されたカード10枚を使用した発音テストの結果、事前より事後の得点が有意に向上した(t=.000)。録音した音声の採点に当たった英語母語話者の信頼性は、複数の採点者によるパイロットテストで検証されている(Cronbach $\alpha=.521$)。Intelligibility が評価基準であり、英語の苦手

な学生が、発音記号を見て英語母語話者に通じる明瞭な発音で音声化できるようになったことが実証された。 発音記号学習に対する大学生のコメントシートをコーディング分析し得られたカテゴリーのうち、「情意面」 「知識面」において変容があったことが認められた。

2.2 教員を対象としたパイロットスタディ

中学校英語二種免許取得講習の受講生である小学校教員を対象に、試作版を使用して 2 週にわたり発音記号を指導した。受講前から発音記号を知っていた教員を除く 30 名について事前事後の発音テストを分析し、有意差が確認された。受講者からは、受講後も本教材を高く評価する声が寄せられ、完成後は自己学習のために利用したいという要望もあった。小中高の教員養成課程において本教材を活用する意義が裏付けられた。

本実践のみならず、複数の小中高の教員研修会において試作版への改善点や要望が多数寄せられたため、それらを反映させるべく、英語母語話者も研究協力者に加えた上で教材開発を継続した。音声学の専門的見地からは「IPA と中学高校の検定教科書が採用している発音記号には差異がある」との意見も寄せられたが、汎用性を優先し、簡易版を使用する方針を維持した。

2.3 中学校における実践

音声学の知識も発音指導経験もない教員でも、本教材を使用すれば発音記号指導が可能であるかを検証した。関西の公立中学校に勤務する採用2年目の教員が、研究チームのメンバーから発音記号の指導を受けた上で、本教材を使用しモジュール形式で中学1年生全学年の指導に当たった。1年間の指導の事前事後に実施した発音テスト(山本・里井、2017)の結果、Intelligibilityにおいて隣校の中学1年生と同様の向上が確認された。英語力にも自信がないと語る経験の浅い若手教員が、高い英語力を有する経験豊富な隣校の教員(発音記号は一切使用していない)と遜色ない発音指導を実現で

きたことは、発音記号を使用することの効果と、誰にでも使える本教材の汎用性を裏付けるものとなった。

2.4 大学オンライン授業における調査

兵庫の私立大学において、教職課程の 2 回生 92 名を対象に調査を実施した。zoomによるオンライン授業で、最終授業に 1 度だけ 60 分間の発音記号指導を行った。事前事後に記述式のアンケート調査を実施し、共起ネットワーク処理を施したところ、「読み方」「読める」「正しい」「教える」というワードが抽出された。発音に自信のない学生は 65%であったが、「発音記号が読めるようになりたい」との回答は事前・事後で有意に増加 (p=.000; r=.46) し、本教材を通し教職課程の学生の意識が変容したことが示唆された。

3. 大学生の反応検証のための実践

3.1 参加者

京都の私立大学で外国語強化科目 (TOEIC550 点以上) を履修した38名 (2回生18名、3回生11名、4回生9名)の英語専攻学生が本実践の参加者である。これまでと異なり英語力の高い参加者となるが、音声学を履修し発音記号を習った経験のある学生は皆無であった。

3.2 実践の流れ

半期 14 回の授業はすべて Microsoft Teams をプラットフォームとするオンライン授業となったため、完成した発音記号教材スライドを共有しながら毎回 10 分程度のモジュールで指導した。また小テストを毎時間の最初に実施した。発音記号のみで示された 3 つの単語(既習)を見て「発音を自分で推測してスペリングを打ち込む」形式である。毎時間の最後には、自由記述をコメントシートに記入するよう指示した。

3.3. 結果

全授業のコメントを中西他 (2015) の手法でコーディング分析した結果、5つのカテゴリーが得られた。表1は、各カテゴリーとその例を示したものである。

表1 コメントシートから切り出されたカテゴリーとその例

思考・判断	「発音は良しあしでなく聞き取っても らえるかどうかだ。考え方が変わった」
学びに向かう力	「難しかったけど練習しようと思う」
知識面	「曖昧母音は多くの単語についている ことがわかった」
情意面	「/ju:s/に見事に引っかかりジュースだ と思ってしまった!」「めっちゃ発音が 上手に聞こえます!やってよかったで す!」
自己調整学習	「習った発音記号たちを思い出しなが ら、今一度自分なりにつむぎなおして印 刷して持っておこうと思う」

次に、「初期(4週)」「中盤(4週)」「終盤(4週)」 「最終日」という時系列に、各カテゴリーに該当する切 片(記述)を書き出し(1つの記述に複数のカテゴリー が該当するケースは、のべ数で示している)たところ、 表2のような結果が得られた。

表 2 時系列ごとの切片

	切片数	カテゴリー
初期	3	思考・判断 1, 学びに向かう力 1, 知識
		面 1
中盤	4	情意面 1, 学びに向かう力 1, 知識面 1,
		思考・判断 1
終盤	5	知識面 1, 情意面 1, 思考・判断 1, 自
		己調整学習 1, 学びに向かう力 1
最終日	11	自己調整学習 4, 情意面 3, 知識面 3,
		思考・判断 1

4. 考察

個々の学生の差はあれ小テストの得点は向上したため、知識面への言及が増加することは予想ができた。しかし、情意面・学びに向かう力・思考判断における切片が時間の経過と共に増加していることは、受け身の学習にとどまらずメタ認知が働いていることを示唆している。自己調整学習のカテゴリーでは、今後の学び方への意識改革への言及もあったことから、発音記号は学生が自律学習者となるために有効であると結論づけられる。同時にオンライン授業にも応用可である教材の利点が示唆された。オンライン授業は自律学習者に有利だと言われるが、最初からそうではなかった学生をも向上させられたことは、大きな成果である。

謝辞

本稿執筆に当たり貴重な助言を賜った龍谷大学里井久輝教授、神戸親和女子大学眞崎克彦教授に感謝する。中高大の教員が授業で活用し、あるいは大学生、小中高の現職教員など英語学習者の自己学習に資することが教材開発の目的であるため、科研費成果報告 Web サイトでダウンロード可となっている(https://teaching.main.jp/index.html)。教材開発、Web サイト開設に当たっては JSPS 科研費(基盤研究(C) 18K00860)、京都外国語大学出版助成金(2020)の助成を受けた。

参考文献

大高博美・杉浦香織(2006)「英語音声教育におけるシュワー (/a/) の重要性」『英語教育』55(11),67-69,大修館書店. 中西のりこ・坂上潤・山本祐太(2015)「発音記号学習に対する大学生の意識の変化」『LET 関西春季研究大会プログラム』 眞﨑克彦・山本玲子(2020)「小学校教員養成課程の大学生を対象とした発音教材の調査」『小学校英語教育学会岐阜大会発表予稿集オンライン』

眞﨑克彦・山本玲子 (2019)「小学校教員を対象とした発音教 材作成についての問題点の検証」『小学校英語教育学会北海 道大会発表予稿集』14.

Yamamoto, R. (2017) Effects of EFL Instruction Utilizing International Phonetic Alphabet (IPA) on Intelligibility of Japanese Students. The IAFOR Hawaii 2017 Official Conference Proceeding.

山本玲子 (2018)「小学校教員を対象とした発音指導の効果―フォニックスから発音記号へ―」『小学校英語教育学会長崎大会発表予稿集』16.

山本玲子・里井久輝 (2017)「日本語と英語のプロソディの違いに気づかせる小学生への語アクセント指導の試み:相手に伝わる発音への効果」『関西英語教育学会紀要』40,11-19. 山本玲子・里井久輝・眞﨑克彦 (2020)「音声学を履修していない教員の発音指導力向上に発音記号はどのように貢献できるか」『LET 関西支部研究収録』18,1-18.